

ヘブル人への手紙8章 「新しい契約の仲介者」

1A 天における大祭司の務め 1-6

1B 主に設けられた天の幕屋 1-3

2B 天の写しである地上の幕屋 4-6

2A 更新された契約 7-13

1B 人々にある欠け 7-9

2B さらにすぐれた約束 10-13

本文

ヘブル書 8 章を開いてください。私たちは、ヘブル人への手紙の、最も“濃い”部分の始まりを読みます。8 章から、イエス様がどのように大祭司として、天におられるのかを語り始めます。8 章から 10 章まで語り、それゆえ、私たちがしっかりと、キリストご自身に希望を置かなければいけないことを語っていきます。

もう一度思い出してください、この手紙は、ユダヤ人で、イエスを信じる人々に書いたものです。イエスを信じているのですが、他の信じていないユダヤ人と同じように、神殿礼拝を献げていました。そして、イエスを信じていると、自分たちの属しているユダヤ人共同体の中で軋轢が生じるので、その圧迫の中で、信仰生活をあまり表に出さず、その信仰さえ曖昧になっていたという、霊的危機の中にありました。そこで著者は、キリストが、どれほどすぐれたお方なのかを語ります。

そして、7 章までに、著者は、イエス様が、メルキゼデクの祭司の例にならった大祭司であるということ語りました。地上には、レビ族のアロンの家系によって綿々と続いている神殿があります。けれども、聖書には、実は、系図のない、サレムの王、いと高き方の祭司、メルキゼデクが出てきます。アブラハムが、彼に対して十分の一を献げます。そしてメルキゼデクは、アブラハムに祝福します。アブラハムはイスラエルの父祖ですから、レビも含めてすべてが、この祭司に十分の一を献げ、そして祝福を受けたと言えます。はるかに、メルキゼデクの方が上位なのです。そして、詩篇 110 篇によれば、キリストはこのメルキゼデクの位の祭司なのだということです。

レビ族の祭司たちは、罪を持っています。そして、死んでいきます。それに対して、イエス様は、罪から離れています。いつまでも生きています。そして、天におられるお方です。この大祭司による礼拝を、私たち教会は献げているのだということを、著者は語っているのです。

これから学ぶところ、8 章から 10 章にかけては、聖書を信じて、聖書全体を見て言っている人たちにとっては、理解の鍵を与えるとても大切な箇所です。旧約聖書にある、イスラエルの民に与えられた幕屋、いけにえの制度などが、どのような形で、新約聖書につながっているのか？を知るこ

とができます。

全体のイメージとしては、イスラエルに与えられた神の恵みは、確かに恵みなのだけれども、完全に達していないというもどかしさがある、と言ってよいでしょうか。それらは、すべて神から来ていて、良いもの、正しいものなのだけれども、それだけで終わらないだろうというものです。完全なものが来る、完全な方が来ることで、初めてすべて満たされるというものです。旧約聖書の最後、マラキ書には、主の怒りの日が来る前に、エリヤが来るという預言で終わっています。未完成のままなのです。完全なものが来ることを待ち望むように、期待するように仕向けています。そして、その完全な方がキリストというのが、新約聖書の中心です。キリストにあってすべてが成就します。

1A 天における大祭司の務め 1-6

1B 主に設けられた天の幕屋 1-3

¹ 以上述べてきたことの要点は、私たちにはこのような大祭司がおられるということです。この方は天におられる大いなる方の御座の右に座し、² 人間によってではなく、主によって設けられた、まことの幕屋、聖所で仕えておられます。

これまで述べてきたことの要点を書き始めています。ずっと、長いこと、イエスが**大祭司**であることを論じていきましたね。それを、まとめていくのです。

イエスは、第一に「**天**」におられます。天について、私たちは何か、ふわっとしたところ、夢のようなかかないところだと思いがちです。しかし、聖書はその逆を語っています。神が王として玉座についておられる天は、この天地万物が滅び去ろうともなお残っている御座です。私たちは、この御座の確かさをすでに読みました。「1:10-12 またこう言われました。「主よ。あなたははじめに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながらえられます。すべてのものは、衣のようにすり切れます。あなたがそれらを外套のように巻き上げると、それらは衣のように取り替えられてしまいます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることはありません。」詩篇 115 篇には、異教徒がイスラエルの民を見下して、「彼らの神は、いったいどこにいるのか。(2 節)」と聞いているのに対して、神の民が、「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行われる。(3 節)」と答えました。天は、私たちが心の中で想像している産物ではなく、むしろ私たちが肉眼で確かだと思っているこの天地を力強く動かし、望むままに動かしておられる神の玉座があるところなのです。

そして、この方が、その天において、大いなる方の御座の右に座しておられるというのは、1章から語っていましたが、御子が、御使いよりもはるかにすぐれておられて、父なる神ご自身が、御子を神と呼ばれています。とこしえに王座に着いていると言われています(8 節)。私たちの世界がどんなに揺れ動こうが、主が神の右の座におられます。私たちの生活がどんなに大変だろうが、主イエスは変わらずに、御座に着いておられます！

そして、イエスは大祭司です。天におられるので、その大祭司が仕える聖所も、地上ではなく天にあるということになります。ここが、著者が伝えたい要点になります。「人間によってではなく」とありますが、これはモーセに神が命じられた幕屋について話しています。主がモーセに対して命令して、わたしの住む幕屋を造れと命じられました。祭具や板、幕などを作るのは、もちろん人間です。主は、知恵のある者に御霊を満ちし、彼らがそれらの祭具や幕などの細工をしました。しかし、天においては、そのような人の介在なしの、主ご自身が設けられた聖所があるのです。

³ 大祭司はみな、ささげ物といけにえを献げるために任命されています。したがって、この大祭司も何か献げる物を持っていなければなりません。

大祭司は、罪のためのいけにえ、全焼のいけにえ、交わりのいけにえ、穀物のささげものなど、いけにえやささげものを主の前に携えるために立てられています。同じように、天におられる大祭司もいけにえを献げました。そのいけにえとは、ご自身の命であり、その流された血です。ご自身が血を携えていったことについては、次の章、9章で詳しく話しています。

2B 天の写しである地上の幕屋 4-6

⁴ もしこの方が地上におられたなら、祭司であることは決してなかったでしょう。律法にしたがってささげ物をする祭司たちがいるからです。

主イエスが、祭司として奉仕をされるのは、あくまでも天においてです。地上においては、レビ族の祭司たちがささげ物をしています。

⁵ この祭司たちは、天にあるものの写しと影に仕えています。それは、モーセが幕屋を設営しようとしたときに、御告げを受けたとおりのものです。神は、「よく注意して、山であなたに示された型どおりに、すべてのものを作らなければならない」と言われました。

ここに、旧約聖書にあるものを理解する鍵があります。地上の幕屋は、「天にあるものの写しと影」です。出エジプト記 25 章以降に、祭具や幕や板の設計が、細部に至るまで主によって指示されています。その寸法、形状、材料、色など、事細かな指示があり、主はモーセに、「山であなたに示された型どおりに、すべてのものを作らなければならない」と命じられました。なぜそこまで詳しく定められ、かつ聖書の中に幕屋のことが多くの紙面を割いて説明されているのでしょうか？出エジプト記 25 章から、レビ記全体、そして民数記にもかなり書かれています。列王記に入れば、ソロモンの建てた神殿の青写真があります。まるで、建築士の青写真のようなもので、それに多くの紙面が割かれている意義は何なのか？とってしまうのです。けれども、ここで分かるのです。それが天におけるものの写しと影だからです。主が御座におられることを示しているからです。

私たちの信仰というのは、神とその栄光に対するものです。しかし、私たちの意識は、何か自分

たちが関わる事が中心になります。聖書を通読するにも、創世記の物語があり、出エジプトの物語があり、面白いです。映画化されることも多いですが、幕屋での奉仕についての映画は決してできませんね。そこには、何も面白いところがない。ヒューマン・ストーリーがないからです。しかし、本当の信仰というのは、主の栄光を見ることです。ダビデが詩篇で、こう言いました。「27:4 一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。」その写しと影が地上の幕屋なのです。

そして、実体である聖所は天にあります。黙示録 8 章を開いてください。6 章から、神が終わりの時に下す災いについて描かれています。8 章では第七の封印が解かれました。そして、こう書いてあります。「8:3-5 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声がとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。」

天にある神の御座には、金の祭壇がありました。そこは香が立ち昇るところです。その火を御使いが地に投げつけると、災いが起こりました。モーセに示された幕屋には、聖所があります。聖所は垂れ幕によって二つの空間に仕切られており、大きい方が聖所、小さい立方体の空間が至聖所です。聖所に入ると、右手には十二個のパンが供えられている、臨在の机があります。左手には、七つの枝がある燭台があります。そして正面に、垂れ幕に面して香壇があります。天にあるものの写しが、地上の幕屋だったのです。

このように、天にあるものの実体があって、それを写し出し、地上において天を思うことができるようにしているのが、地上の幕屋です。地上において、不完全ながらも、天にあるものを模倣して行っている中で、天におられる神とキリストに目を向けるように設計されています。天に対する希望を抱くようにしているのです。

ところが、時を経ているうちに、その神殿にあるものを行っていることが、そのまま自己目的化してしまいました。エレミヤが、エルサレムで、神殿があるからバビロンから攻められることはない、バビロンから救われるのだとする彼らの考えに対して、真っ向から否定しました。悔い改めなければ滅びることを警告しました(7:3-8)。同じことをステパノが、サンヘドリン、最高法院で語りました。神殿を建てたソロモン自身が、天の天も、神を収めることはできず、ましてやこの神殿に収めることなどできないと告白しているのですから。(I 列王 8:27)ステパノはこう言っています。「使 7:47-50 そして、ソロモンが神のために家を建てました。しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。『天はわたしの王座、地はわたしの足台。あなたがたは、わたしのためにどのような家を建てようとするのか。——主のことば——わたしの安息の場は、いったいどこにあるのか。これらすべては、わたしの手が造ったものではないか。』」

私たちも、教会、その建物、目にみえるものがあります。人々がこのように集まっています。けれども、それは、天にあるものの実体に触れていく、御霊によって触れていくことそのものなのです。天からの賜物にあずかって、それを分かち合って、私たちは手で触るかのように、キリストに触れることができるのです。しかし、もし礼拝の順番や、活動や行事そのものに目を留め、それをやっていたら自分は安泰だと思ったら、当時のユダヤ人と同じ過ちを犯してしまうのです。

⁶しかし今、この大祭司は、よりすぐれた契約の仲介者であるだけに、その分、はるかにすぐれた奉仕を得ておられます。その契約は、よりすぐれた約束に基づいて制定されたものです。

「しかし今」という言葉が出てきたら、そこが大きな対比になっています。そして、「よりすぐれた」という言葉が三回も出てきます。一つは、契約について。次に、奉仕について。そして、約束についてです。

契約について、私たちは午前礼拝で学びました。神が人に関わる時に、約束をもって関わるべく、ご自身を契約の中に縛ります。その時に、神と人との間の仲介者がいます。シナイ山のふもとで結んだ契約は、モーセが仲介者でした。すばらしい契約でした。主に聞き従えば、これこれの祝福があり、いのちを得るといふ約束があります。その奉仕もすぐれたものでした。顔と顔を合わせて、主と語るという、すごいものでした。しかし、イエスが仲介者となられている、新しい契約は、その奉仕においても、約束においても、さらにすぐれているのです。

2A 更新された契約 7-13

1B 人々にある欠け 7-9

⁷もしあの初めの契約が欠けないものであったなら、第二の契約が必要になる余地はなかったはずですが。

「あの初めの契約」とは、モーセを仲介者として立てられた、シナイ山における契約です。「第二の契約」とは、これから読んでいく、エレミヤが預言した、新しい契約のことです。イエス様は、この新しい契約の仲介者として、天における大祭司の務めを行われます。

新しい契約を理解するには、イスラエルの歴史と、バビロンによってエルサレムが破壊され、民が捕え移されるという、エレミヤが置かれていた背景を知る必要があります。エレミヤが生きていたときは、イスラエルは神に対して背信の罪を犯し、もう取り返しがつかないほど墮落していました。モーセはかつて、シナイ山の上で、またヨルダン川の東岸で、主が与えられた律法に聞き従わないならば、これこれの呪いが来るという預言をしていました。まさにモーセが預言したとおりの呪いが、イスラエルにもたらされようとしていました。エレミヤは、モーセが預言した、引き抜かれて、散らされて、根絶やしにされるということが目の前に迫っているという預言が間もなく実現することを知っていました。

ところで、イエスには、ユダヤ人の間でもしかしたらエレミヤでは？という噂が立っていました(マタイ 16:14)。主も同じように、当時のユダヤ人が神に背いていたことを嘆き悲しんでおられたからです。同じように神殿が、異邦人であるローマに滅ぼされ、離散の民となることを預言されました。

けれども主はエレミヤに、「わたしは引き抜いて、また植える。」とお語りになっていました(エレミヤ 1:10)。イスラエルは、モーセを通して与えられた契約にしたがって引き抜かれるけれども、主は一方的な憐れみで契約を更新してくださり、その契約によって彼らを回復させるということです。モーセを通して与えられた契約は、イスラエルが従順であることが必要条件でした。エレミヤを通して約束されたことは、主が一方的に行なわれる無条件の契約です。「あなたがたが聞き従えば、わたしは祝福する。」というのが、シナイにおける契約の内容でした。しかし、新たな契約は、「わたしは、これこれのことをする。」という、主が一方的に果たされる約束です。

イエスは、このエレミヤを通して与えられた約束に基づいて、十字架につけられる前夜、過越の食事を弟子たちとともに取られている中で、こう言われました。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。(ルカ 22:20)」午前礼拝で学びました、人の罪を赦し、清めるために、神は、身代わりの死とその流される血をもって、赦することを決められていました。そして、流される血をもって、いのちを与えることを決めておられました。

主は、アダムとエバがエデンの園を離れて以来、何とかしてご自身のところに連れ戻すご計画を立てています。ノアと契約を結んだ時も、人々を滅ぼす大洪水はもう二度、起こすまいと約束され、そのしるしとして虹を与えられました。アブラハムには、その子孫からすべての国々に祝福を与える約束をされ、そのしるしは、男子の割礼であると決めました。そして、アブラハムの子孫であるダビデには、彼の世継ぎの子が王となり、その国はとこしえに続く、神の国となると約束されました。そのしるしとして、その子はインマヌエルと呼ばれて、処女から生まれるとされました。イエスは、アブラハムの子孫であり、ダビデの世継ぎの子であり、そして処女から生まれているのです。

そして、モーセの契約に違反した民について、新しい契約をもって、わたしは彼らの罪を赦すと、エレミヤを通して、主は約束されます。その契約を確かなものにするため、有効にするために、イエスはご自身の血を流されたのです。その血が、新しい契約のしるしとなったのです。

⁸ 神は人々の欠けを責めて、こう言われました。「見よ、その時代が来る。 —主のことば— そのとき、わたしはイスラエルの家、ユダの家との 新しい契約を実現させる。

ここで大事なのは、「人々の欠けを責めて」というところです。モーセの契約が欠けているのではなく、それを守り行えなかった人々に欠けがあるので。「ロマ 7:12 ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。(ローマ 7:12)」と使徒パウロは言いました。しかし、続けて彼はこう言っています。「7:13 それでは、この良いものが、私に死をもた

らしたのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、罪がそれをもたらしたのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされました。罪は戒めによって、限りなく罪深いものとなりました。」イスラエルの歴史で起こったのは、これなのです。そして、それはモーセがすでに、主によって、彼らのご自分に背くと語られていたのです。律法によって、彼らが義と認められるのではなく、むしろ、その罪が明らかにされると、主は前もってご存じでした。

しかし、それはイスラエルの民が特別に罪深いものではありません。いや、むしろ異邦人である私たちに、自分たちのうちに善はなく、罪が宿っており、神のすばらしいおきてに、従うことはできず、むしろ、その罪が明らかにされるのだよ、ということなのです。私には、今となっては良い思い出があります。高校生の時に、英語が興味あって、教会に行きました。宣教師たちがいました。私がかなり、つんつんしていたんだと思います。若い宣教師の方が、はっきりと教えてくださいました。「クリスチャンになったら、良い人間になるとは思っていけない。もっと自分が罪深いことがはっきりします。」この、はっきり語ってくれたことが心に残り、後に信仰をもって、はっきりと分かりました。

ところで、このエレミヤの預言について、最も大きな特徴は、「わたしが」という主語です。これと、モーセの時に与えられた契約との大きな違いがあります。モーセの時は、「あなたがたは」という主語が始めにきます。例えば、申命記 6 章、「6:3 イスラエルよ、聞いて守り行いなさい。そうすれば、あなたは幸せになり、あなたの父祖の神、【主】があなたに告げられたように、あなたは乳と蜜の流れる地で大いに増えるであろう。」主の命じられることに聞いて守り行いすれば、乳と蜜の流れる地で、大いに増えるだろうと約束されています。これ自体、恵みなのです。守り行いすれば、主がとてつもない祝福を降り注いでくださるのです。しかし、彼らは、命令をことごとく破りました。

そこで、主がエレミヤを通して与えられた約束は、「わたしは」「わたしが」と、ずっと主が一方的に行われることに基づいているのです。私たちが、いかに忠実に神に対して生きられるのか？に、基づいているのではなく、神がいかに、キリストにあって真実を尽くしてくださったか？にかかっています。これは神の恵みであり、聖書は初めから終わりまで、恵みなのです。初めに、神は天地を創造された、という、神のなされたことから始まり、「主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。(22:21)」という黙示録の言葉で終わるのです。

ですから、私は、信仰をまだ持っていない人々にはもちろんのこと、信じた人々にも、このことを強調します。新しい信者の学びには、「確信」というテーマがあります。そこには、自分が救われているという確信は、神の御言葉に基づいていると書いています。そして、こうも書いています。「自分の救いに疑いを持ったら、救いは、神が私たちのためにしてくださったことのみに基づいていることを思い出してください。たとえ自分の心が時にそのことを忘れても、このことは真実なのです(1ヨハネ 3:19-20)。神がご自分の約束を誠実に守ってくださることを、あなたが思い出すことができるように神に祈り、願いましょう。」

そして、「イスラエルの家、ユダの家との新しい契約を実現させる。」とあります。新しい契約は、イスラエルの家とユダの家を実現されるのであり、異邦人とはありません。モーセの契約はユダヤ人のものであり、新しい契約は異邦人クリスチャンのものだというのは、誤った考えです。そうではなく、イスラエルとの契約なのです。では、我々異邦人は、どのようにこの契約にあずかっているのか？それが、神の秘められたご計画にありました。

それは、ただユダヤ人だけでなく、イスラエルの神を信じるすべての者に、キリストにあって救いを与えるというご計画です。ペテロが、ローマの百人隊長、コルネリウスの一家に聖霊を注がれることによって、神は明らかにされました。「エペ 2:12-13 そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。」近い者にされたのです。

そして、ロマ 11 章によると、異邦人の完成が来た時に、イスラエルがみな救われるとあります。「11:25-26 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬度を除き去る。」イスラエルに対する新しい契約の約束は残されているのです。

神は、人が持っている罪の問題をどのように処理されるか、その取り扱いをいろいろ考えておられました。罪を犯す魂は死ぬのですが、人は何度も何度も失敗して、主が与えておられる、罪の赦しの備えをみすみす逃してきた歴史を辿ってきました。しかし主は、終わりの日に、罪を犯したものを罰しなければいけないという定めを、ご自分のうちで実現されました。つまり、ご自分のひとり子が、人々の代わりに罪の罰を受けられることによって、もはや人々には罪に対して罰をもって報いない、という取り決めをご自身のうちで定められたのです。

⁹ その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。彼らはわたしの契約にとどまらなかったで、わたしも彼らを顧みなかった。——主のことば——

主は、イスラエルの民が契約から遠く離れました。ぜひ、このことを知るために、申命記 28 章から 32 章までを読まれるとよいと思います。初めには、こう言っています。「28:1-6 もし、あなたが、あなたの神、【主】の御声に確かに聞き従い、私が今日あなたに命じる主のすべての命令を守り行うなら、あなたの神、【主】は、地のすべての国々の上にあなたを高く上げられる。あなたが、あなたの神、【主】の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたについて行く。あなたは町にあって祝福され、野にあって祝福される。あなたの胎の実も大地の実りも、家畜が産むもの、群れの中の子牛も群れの中の子羊も祝福される。あなたのかごも、こね鉢も祝福さ

れる。あなたは入るときにも祝福され、出て行くときにも祝福される。」すごい祝福ですね！

けれども、28章15節以降は、ずっと聞き従わなかったら、どんなのろいが来るかを警告しているのです。「28:15-19 しかし、もしあなたの神、【主】の御声に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる。あなたは町にあってもものろわれ、野にあってもものろわれる。あなたのかごも、こね鉢ものろわれる。あなたの胎の実も大地の実りも、群れの中の子牛も群れの中の子羊ものろわれる。あなたは入るときにもものろわれ、出て行くときにもものろわれる。」そして、延々と28章の68節まで、そして29章全体も、呪いについて語っています。その上で、30章に、彼らが離散の地で、主に立ち返ったら、彼らを約束の地に戻すと約束してくださっているのです。

そして31章には、モーセが後継者であるヨシュアを連れてきて、また祭司たちを連れてきて、契約の書を渡します。それが終わったら、すぐに主がモーセに現れて、こう言われます。「申 31:16 【主】はモーセに言われた。「見よ、あなたは間もなく先祖とともに眠りにつこうとしている。この民は入って行こうとしている地の異国の神々を慕い、自分たちのうちで淫行を行い、わたしを捨てて、わたしがこの民と結んだわたしの契約を破る。」そして、今度はモーセは、彼らが捕囚の民になった時に、思い出してもらいたい歌を残しているのです。なんで捕囚の民になったのかを、歌を何気なく歌っている時に、思い出してもらいたいから、という意味で。

こんなにも、早く、墮落してしまうことを主が予告されているのは、それだけ、律法では人の救いは完成せず、その続きがあることを暗示しているのです。その先には、全てを完成される方、メシア、キリストが来ることを知ってほしいという思いが込められているのです。

2B さらにすぐれた約束 10-13

¹⁰ これらの日の後に、わたしが イスラエルの家と結ぶ契約はこうである。—主のことは— わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

「これらの日の後に」とあるように、エレミヤの時代より、ずっと先に契約が結ばれるとあります。そうです、500年以上経ってから、主イエスが来られて、新しい契約が結ばれました。そして、イエスを信じるユダヤ人たちの間に、聖霊が下りました。そして、ここに書かれていることが、実現していきます。今、聖霊と言いましたが、その約束はエレミヤ書ではなく、同時期にすでに捕囚の民となったエゼキエルが預言したことについては、午前礼拝で話した通りです。石の心を、肉の心に変えて、それで主の命令に聞き従うようにしていただきます(36:25-27)。

律法に問題があるのではなく、罪によって心が石のようになっていることが問題なのです。それを、御霊が心の一新を行われるのです。「テトス 3:4-6 しかし、私たちの救い主である神のいつく

しみと人に対する愛が現れたとき、神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」

この、御霊の注ぎによって、神と自分との関係が、主人と奴隸のような関係ではなく、父と子にある愛の関係に変えられるのです。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隸の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と呼びます。」アバとは、お父ちゃんと呼んでいるようなものです。このように、神を父とする愛の関係に入っているのです。私たちに神が命令される時は、自分が神にこよなく愛されていることを知っているのです。自分がまるで、仕事で報酬を得るように仕えるのではなく、ただ愛して、信頼しているから、従うのです。「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。(ヨハネ 14:15)」愛の力は、強いのです。愛の関係からくるからこそ、主に命じられていることを守り行うことができます。

¹¹ 彼らはもはや、それぞれ仲間に、あるいはそれぞれ兄弟に、『主を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、小さい者から大きい者まで、わたしを知るようになるからだ。

旧約時代には、神の御霊がある特定の人々に外側から働きかけていましたが、新約においては、神ご自身が御霊を、すべて信じる者に与えてくださいます。したがって、神のみことばが語られるときに、それを教えるのは、聖書教師でもなく牧師でもなく、聖霊ご自身なのです。「1ヨハ 2:27 しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。」と言いました。注ぎの油、すなわち聖霊が私たちのうちに留まっておられて、聖霊が私たちの霊に語りかけて、そこで神との関係が確立されます。そして「小さい者から大きい者まで」とありますね。すべての人に御霊が注がれます。

¹² わたしが彼らの不義にあわれみをかけ、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

完全な罪の赦しの宣言です。罪を赦すだけでなく「思い起こさない」と主は言われます。罪を責めるかたちで、持ち出さないということです。

それをよく表しているのが、ヨセフが兄たちに行った行動であります。父ヤコブが死んだ後に、兄たちがヨセフのところに来ました。「創 50:18-21 彼の兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して言った。「ご覧ください。私たちはあなたの奴隸です。」ヨセフは言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか。あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かさ

れるためだったのです。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたも、あなたがたの子どもたちも養いましょう。」このように、ヨセフは彼らを安心させ、優しく語りかけた。」兄たちは、ヨセフが敵意を表すのではないかと恐れていました。しかし、ヨセフはその悪いことを覚えていましたが、それは神がご計画なされたことだと確信していました。そして、彼らを慰め、優しく語りかけています。まるで彼らが自分に罪を犯さなかったかのようにみなし、振る舞っているのです。

¹³ 神は、「新しい契約」と呼ぶことで、初めの契約を古いものとされました。年を経て古びたものは、すぐに消えて行くのです。

ヘブル書の著者は、ギリシヤ語において強い言葉を使い続けています。「新しい」というギリシヤ語には、時間的に新しいということ、時間的にもそうだが質的に新しいという二つの意味が別々の単語で使われています。「新しい契約」の「新しい」は、後者です。そして、「古い」という言葉も、質的に古いという意味で使われています。

ここで思い出さないといけないのは、イエス様の譬えです、古い皮袋に、新しいぶどう酒を入れることはできない。古い着物を、新しい布切れで継ぎ合わせることはできない、ということです。古いのは古いもので、新しいものは新しいもので初めて対応できます。それを、古いものに、新しい契約の仲介者、イエス様を入れようとしているところで問題があると、著者は、ユダヤ人のキリスト者たちに言っているのです。

彼ら、当時のユダヤ人の場合は、古い契約を象徴していた神殿が、紀元 70 年にローマによって破壊されました。すぐに消えていくのを、肉眼でも見ることができました。同じように私たちは、自分が今、しがみついているものがあって、それでイエスへの信仰を持つとうとしていやしないかどうか、吟味する必要があります。自分が、イエス様を純粹に信じると、何かと支障が生じるから、信仰は、そこそこにして、今、自分のしていることに頼ります。しかし、それがいつまで続くのか？すぐに消えていくものなのではないか？ということです。イエスこそが、今も、昔も、いつまでも変わらない方なのです。そして、この新しい契約は何にもまして尊いものです。新しい契約なのですから、日々、心と思いを神に新たにさせていただいて、生きた神との、生きた交わりの中に生きましょう。